

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

所在	文京区小石川2-2-6
園名	クオリスキッズ小石川

1. 活動のテーマ

<テーマ>

自然 「バケツ稲 お米が育つっておもしろい！」
～稲の生長を身近に感じ、世話をする優しい心と食物への感謝の気持ちを育てる～

<テーマの設定理由>

園内で植物を育てたり子ども達が身近な自然や生活に関わる物事に興味をもつ様子が見られた。そこで、給食で毎日のように食べている「ごはん（お米）」が、どのようにして育つか、身近な場所で観察できるバケツ稲の活動は子ども達にとって驚きと発見に溢れ、ワクワクする体験になると考えた。同時に、命ある植物を育てる優しさや、世話をする喜び、そして食物への感謝を育む機会になるであろうと考えテーマに設定した。

2. 活動スケジュール

【6月】

・バケツ・土・苗を見る…大き目のたらいに田植え用の土を入れて、子供たち自身が土をバケツに移して苗を植える。土の感触を味わいながら小分けにした苗を、バケツの中に均等に植える。

【7月】

・水やりを楽しみ、バケツごとの葉の色や高さを見比べる。

【8月】

・太陽と水の大切さを知る。・暑い日の稲の様子を見る。案山子を作る

【9月】

・穂を見つける。写真や絵で生長を振り返る。

【10月、11月】

・収穫体験…稲をハサミで刈る。収穫した稲のもみ殻を取り米粒を取り出す

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

- ・バケツ、たらい
- ・苗
- ・田植え用の土
- ・案山子の材料（古着の衣類、帽子）

※毎月、秋田県のお米農家から送られるビデオレター、リモート中継あり。

（製作した案山子は秋田県の田んぼで実際に使われ、リモート中継で様子を楽しんだ。）

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

【苗の植え付け】

・ 予め練った土をたらいに入れ二人組で土の感触を楽しんだ。子ども達の前で苗を小分けにして優しく扱う説明をした。保育者が植え付けの見本を見せた後、実際に子ども達が指で土にくぼみをつけて苗を植えた。

【水やりと観察】

・ 散歩前にテラスにあるバケツ稲を観察し、バケツごとの葉の色や高さを比べた。
・ 順番に水やりをした。シャワーで水をあげると水が入り過ぎてしまうことを体験し、ペットボトルを使って水やりを行った。

【夏の稲】

・ 日差しが強すぎると葉っぱの元気がなくなる様子を見た。その為にどうしたら良いか考えた。又、水が濁ると藻が繁殖することを知り、定期的に水の入れ替えを行った。
・ 稲を育てるには、こまめな手入れが大切なことを実感した。

【秋の稲】

・ 穂を見つけて、稲の生長と実りをクラスみんなで喜んだ。
・ 稲刈りは安全を考慮してハサミを使い、グループに分かれて一人1回行った。
・ 刈り取った稲を乾燥させて、手でもみを外した後、もみ殻を取った。

（稲穂→もみ→玄米→白米の順で馴染みのある米粒になる事を体感した）

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

【稲の苗付け】

保育者：（稲を見せて）「お米になる稲だよ、稲のお家をバケツに作ろうね」

子ども達：土を触り、「土がベトベトしてる〜」「かたいよ〜」「重たいな〜」

：稲を触り、引っ張ろうとする。

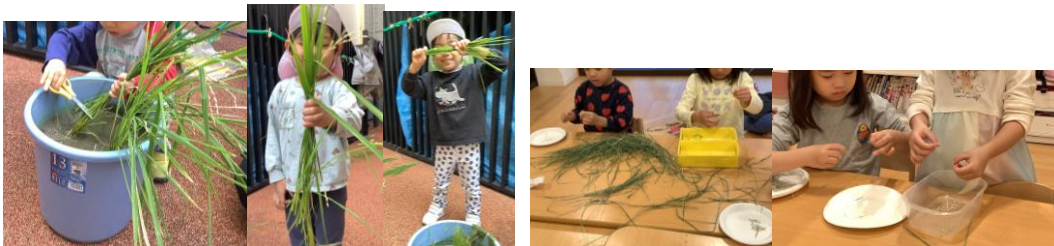
保育者：「稲は優しく触ってね」「人差し指の半分、土に穴をあけて植えようね」

子ども達：そっと稲を持ち丁寧にバケツに植えた。「これがお米になるの？」

【生長観察】

子ども達：バケツごとの稲を見比べて「こっちの方が背が高い！」「葉っぱの先が少し黄色いよ」「こっちの稲はのどが渴いているのかな、元気ないね」「お水をもらって嬉しそう〜」「お水に緑の草が浮いてるよ、新しいお水にしよう！」等と日々、稲の気持ちになり助けようとする（お世話をする）様子が見られた。

【収穫】「とれた！」「これ、みんなで育てたね」と達成感を味わう姿が見られた。実食は難しかったが「見る・知る」を本物の体験を通して味わう事が出来た。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

子ども達が当たり前のように日々に口にしている「お米」が、どのような過程で作られるか実際に体験できた貴重な機会であった。たった一粒のお米にも、長い時間と多くの手間、そして愛情が合わさり実りを迎えている。その事を知ること、ごはんを口にする際の「いただきます」という感謝の気持ちへ自然と繋がっていくと改めて感じた。

それ以上に強く心に残ったのは、子どもたちが学ぶ過程において、自分の五感を使って体験したことを、深く、確かに記憶しているということである。今回の稲の土に触れた経験を、子ども達が砂場遊びの際、砂に水をかけて遊んだ時の記憶と重ね合わせ、「砂場の土よりかたいね」「ベトベトするね」と、言葉にして比べていた。過去の体験が、新しい体験と結びつき、自分の中で理解を深めていく姿が見られた。

又、体験を通して物事を「自分事」として捉え、心で理解しようとする様子も多く見られた。元気のない稲を前に、「疲れちゃったのかな」「のどが渴いたのかな」と、自分の気持ちを重ね合わせる子ども達の言葉からは、稲に寄り添おうとする優しさが感じられた。

体験に勝る学びはない——そのことを改めて実感した時間であった。「やってみたい！」と目を輝かせる子どもたちの姿に触れ、こうした心の動きを大切に育んでいきたいと強く思った。これからも、子どもたちと同じ目線で「一緒にやってみたい」と思える活動を探し続け、自らも学び、成長しながら、子どもたちと共に歩んでいきたい。

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

所在	文京区小石川2-2-6
園名	クオリスキッズ小石川保育園

1. 活動のテーマ

<テーマ>

光

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

様々な光を探していく中で散歩先に公園で花を観察していると光(太陽)と水が必要であるという事を知る。そのような様子から実際に子ども達が主体的に花の水やりをしたり鉢に植えたりし、日々の生活の中で観察していけば光の持つ力について探求していけるのではないかと考えた。

2. 活動スケジュール

- ① 戸外活動中に光を探す。
- ② 花には光(太陽)と光が必要という事を知り、実際に花屋に花の苗を買いに行く。後日鉢植えをする。又、毎日水やりをして育てる。
- ③ ②の活動とは別にヒヤシンスの球根を水栽培し、光を当てる物と当てない物の2種を用意し、比較する中で光の持つ力について保育者や友達と一緒に考え日々観察していく。
- ④ サイエンスショーを体験し、光の不思議さや面白さを感じたり、実際に試してみる。
- ⑤ 今までの活動内容の写真をプロジェクターで映し出して振り返りをする。気付き等を他者と共有する。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

- ・花の苗、植木鉢、球根、比較用の箱
- ・プロジェクター、スクリーン
- ・サイエンスショーの実施

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

身近な花に興味を示していた事もあり、花には光と水が必要な事を戸外活動の際に知る。子ども達とのやり取りの中で更に探求意欲が深まるよう花屋に実際に苗を買いに行く。後日苗を植えて水やりをして、光(太陽)が当たると元気になるという事を目の当たりにする。

ヒヤシンスの水栽培では光に当てる物、当てない物を用意して観察していく。最後に今までの活動写真をスクリーンで流し、振り返る。活動を通して保育者や友達と関わりながら花を育て、光の必要性を感じる事を楽しむ。

又、サイエンスショーでは光と色、影の不思議さを体感する。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

子ども達が身近な花に興味を持っている姿から子ども達と花屋に苗を買いに行く。植えた花に毎日水やりをしたり、水栽培で育てるヒヤシンスの球根の観察を行う。友達や保育者と一緒に対話をしながら観察していきながら、光が持つ力について探求して“考えることそのもの”を活動を通して楽しむ。

園のテラスで育てていると、「お日様があるからお花さんが大きくなってきたんだね」と対話を楽しむ子どもの姿があった。

一方で保育室内では水栽培でヒヤシンスを育てた。そこでは日に当てるものとそうでないものを用意し、比較できるようにした。日々観察するなかで比較していくと「お日様が当たっていないからこっちはヒヤシンスは小さいね。」「お日様に当たった方は大きくなるのが早いね」等子ども達が気付いた事を話す姿も見られた。比較対象を用意する事で光が持つ力について考える事が出来た。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

今回「光の持つ力」に着目してテーマを進めていったが身近な植物を育てていく中で光を当てると大きく育っていくという事に気が付く様子が見られた。日々観察していく際に立ち止まって考える事が出来るよう保育者から考えるきっかけを投げかけると友達や保育者と一緒に考えて発言するという事の楽しさを味わう事が出来たように思う。保育者は日々、テーマやねらいをもって保育に当たる重要性を再確認する機会にもなった。

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

所在	文京区小石川 2 - 2 - 6
園名	クオリスキッズ小石川保育園

1. 活動のテーマ

<テーマ>

数字・図形

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

IQ パズルを通して図形に興味をもち、ソフト積み木など身近な玩具にも○△□など図形があることに気付く姿が見られた。また図形を組み合わせると新たな図形ができることを発見したり閃いたりする姿を通して更に発想力が高まっていくのではと考えた。

2. 活動スケジュール

- ① 保育者が大小の○△□に切った画用紙を用意しておき子どもたちが様々な形を組み合わせて形を作り出していく。
- ② 好きに組み合わせていく中で、出来上がった新たな形や発見を共有していく。

2週間に1回幼児クラスが行う

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

・大小に切った○△□の画用紙(大きさ、形ごとに分けておく)

・台紙

・マンカラ、タングラム、LAQ、こびっと、脳活キューブ等

図形を認識し組み立てるためタングラム、LAQ、、こびっと、脳活キューブ

数量、数を認識しながら遊ぶためボードゲーム、IQ パズル。

4. 探究活動の実践

- ・普段の遊びの中でソフト積み木やマグフォーマーなど、図形に興味をもっている姿を捉え子どもの何気ない気付きに対して耳を傾けたり共感したりして興味関心を深めていった。
- ・大小に切った○△□の画用紙を机の上へ置いておくと子どもたちが気付き興味をもち始め「○○みたい！」「○○ができた！」など複数の形を組み合わせていった。
- ・机上で自由に組み合わせていくうちに、机の上だと動いてしまう、との声があったため画用紙に貼れるようにした。
- ・貼っていく中で、出来た形に色が塗りたい、周りに絵を描きたい、との声が聞こえてきたためクーピーを用意すると子ども自身で発展させていき自由に楽しむ姿が見られた。

<活動の内容>

活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

(机の上にある大小の○△□の画用紙を見つけて)

子ども A「○と○で雪だるまができた！」

子ども B「△と△でリボンになるんじゃない？」

次々と図形を組み合わせて形を作っていく子どもたちに対して保育者は様子を見守りながら子どもが作り出した図形や発見に対して共感したり形が出来上がる楽しさを共有したりしていった。

子ども C(机上で形を組み合わせながらも動いてしまい何度も置き直しやりづらそうにしている様子が見られる。)

「これ、動いちゃうからのりで貼ったらいいんじゃない？」

(保育者が画用紙とのりを持って来ると画用紙の上に乗せ始める)

子ども A「雪だるまにリボンつけちゃおーっと！」

子ども B「ミッキーにリボンつけたらミニーになったよ！」

子ども C「もうすぐ節分だからやっぱりお豆にしようかな？」

子ども B「ミニーちゃんにお顔描きたい！！」

保育者は子どもの要求に合わせてその都度必要な道具を用意し子どもが自由に発想して楽しめるようにした。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

・自分たちで楽しみながら自由に図形を作ったり考えたりして作っていく過程の中で形を組み合わせるだけでなく、画用紙に貼り付ける、絵を描くなど次々と子どもたちからアイデアが上がっていき子どもたち自身で発展させていった。机上で形を並べている時と画用紙の上に貼る時とで全く違う形に変化していったり、友だち同士で会話をしながら進めていく中で楽しみにしている節分の話題になりそこから三方と豆に見立てたりと子どもの発想力の豊かさによって変化する様子が見られ個性豊かな作品となっていった。またのり付けをしている中で配置がずれてまた新しい形が生まれ発見した時に見せた子どもの表情には驚き、嬉しさ、誇らしさなど様々な感情が読み取ることができた。その様子に周りの友だちも気が付き「すごいね!」「どうやって作ったの?」など更に意欲的に取り組もうとするきっかけになっていったように感じた。